おやこば
からくご

池田眞也

おやこばからくご　登場人物

美濃部孝蔵　……古今亭志ん生
美濃部りん　……孝蔵の妻
美濃部美津子……孝蔵の長女
美濃部喜美子……孝蔵の次女
美濃部清　……孝蔵の長男、金原亭馬生(十代目)
美濃部強次　……孝蔵の次男、古今亭志ん朝
美濃部治子　……清の妻

桂文楽(八代目)

春梅亭浮草
古本屋の店主
呉服屋の番頭
金原亭桂馬……馬生の弟子
古今亭圓菊……志ん生の弟子
桂小勇　……文楽の弟子

新助　……『鰍沢』の登場人物
お熊　……『鰍沢』の登場人物
伝三郎　……『鰍沢』の登場人物

三遊亭金馬(三代目)
三遊亭圓生(六代目)
林家正蔵(八代目)

おやこばからくご　登場人物

美濃部孝蔵　……五代目古今亭志ん生
美濃部りん　……孝蔵の妻
美濃部美津子……孝蔵の長女
美濃部喜美子……孝蔵の次女
美濃部清　……孝蔵の長男、十代目金原亭馬生
美濃部強次　……孝蔵の次男、三代目古今亭志ん朝
美濃部治子　……清の妻

桂文楽

春梅亭浮草
古本屋の店主
呉服屋の番頭
金原亭桂馬
古今亭圓菊

新助
お熊
伝三郎

三遊亭金馬(三代目)
三遊亭圓生(六代目)
林家正蔵(八代目)

落語家Ａ
落語家Ｂ
漫才師Ａ
漫才師Ｂ
手品師Ａ
前座Ａ
客Ａ
落語家Ｃ
落語家Ｄ

落語家Ｅ
郵便配達員
店の老主人
その妻
ラジオのアナウンサー
長屋の住人Ａ
長屋の住人Ｂ
長屋の住人Ｃ
兵士の妻
その息子
戦災孤児たち
傷痍軍人
街娼
呉服屋の店員
質屋の店主
牛太郎たち
落研の学生
前座Ｂ
前座Ｃ
前座Ｄ
常連客Ａ
常連客Ｂ
落語家Ｆ
落語家Ｇ
落語家Ｈ
客Ｃ
山田夫人
佐藤夫人
テレビのアナウンサー

『おやこばからくご』

池田眞也

#寄席、全景

昭和二十二年

#同、高座

落語家Ａによる滑稽話。
笑う観客。
手品師Ａによるマジックショー。
目を見はる観客。
漫才師Ａ、Ｂによる漫才。
腹をかかえて笑う観客。
ベテラン落語家Ｂによる人情話。
聞き入る観客。

#同、入口

重い足取りでやってくる美濃部清(19)、中に入っていく。

#同、楽屋

芸人たち数人が談笑している。
入ってくる清。

清　「おはようございます」
誰も返事をしない。

清　「……」

＊　＊　＊　＊

着がえている清、近くにいた前座Ａに話しかける。

清　「根多帳を見せてもらえませんか」

前座Ａ「そのへんにあるでしょ」
去っていく前座Ａ。

清　「……」

＊　＊　＊　＊

根多帳を見ている美濃部清。その日の出演者と演じられた演目が書かれている。

清　「食いもんがないねえ……」
落語家たちが数名、時々清のほうを見ながらヒソヒソ話をしている。
前座A「なにモタモタしてるんですか。日が暮れちまいますよ」
清　「はいはい」
清、楽屋から出て行く。
清が出て行くのを見届けると落語家たちがネタ帳のまわりに集まってきて演目を書き足す。そのなかに『うどんや』が入っている。

#同、高座
めくりには「古今亭志ん朝」とある。(清の当時の名前である)
清、『うどんや』をはじめる。
清にテロップ「古今亭志ん朝(初代)」
清　「なーべーやーきーうどん……」

#同、舞台袖
落語家たち笑いをこらえながら清の高座を覗いている。

#同、高座
清　「寒いな。うどんは寒いほうがいいって言うけど、こんなに寒くちゃいけねえ。人っ子ひとりどころか犬一匹歩いてやしねえ。一回りして帰ろう。なーべーやーきーうどん……」
客たちがヒソヒソ話を始める。
清、なにかおかしいと感じながらも話し続ける。
客　A「今聞いたばっかりだよ」
清　「え？」

#同、楽屋
落語家たち、我慢できずに大爆笑。
落語家C「もどってきた」
落語家たち笑うのをやめて散る。
清、楽屋の中に入ってくると根多帳を乱暴にめくる。
清の二人前に『うどんや』と書かれている。
清、前座Aを捕まえる。
清　「お前え、わざとやっただろ」

前座A「なにをです？　あたしはきちんとつけてましたよ」
春梅亭浮草が間に入る。
浮　草「ちゃんと見ない人が悪いんでしょ。でもよかったんじゃないの。誰かさんの下手くそな噺聞かされるよりよっぽどましでしょ」
清、顔を真っ赤にして楽屋から出て行こうとする。落語家Cが呼びとめる。
落語家C「清さんよお、おめえのお父っつぁんから貸した金、あれは古今亭が死んじゃったら全部チャラになったのかい？」
落語家D「俺も古今亭に五十円貸してんだけどな」
落語家E「うちの師匠なんか志ん生師匠に一日だけって羽織貸したら戻ってこないんだよ」
落語家C「人の商売道具質に入れて飲むってか。いったいどういう了見してるんだか」
清、恥ずかしそうに楽屋から出て行く。

#道

とぼとぼと歩く清。
戦争の傷跡の残る街。

#古本屋、前

立ち止まり逡巡したあと中に入る。

#同、店内
古本屋「いらっしゃ……(清だと気づく)」
清、奥の棚にむかい、「三遊亭円朝全集」の前で止まる。一冊とってページをめくる。
店主が背中から話しかける。
古本屋「立ち読みで読破されちゃったら迷惑なんだけどな」
清　「もうちょっと待っとくれよ。金がたまったら買うからさ」
古本屋「あんた去年からそう言ってるじゃないか。こっちだって商売だから、金を払ってくれる客に売るまでよ」

#なめくじ長屋、外観

貧乏長屋が二～三十件並んでいる。
そのうちのひとつが美濃部家である。

#美濃部家、奥の和室

和室が二部屋ついた平屋に母親りん(47)、長女美津子(23)、長男清、次男強次(9)の親子四人が住んでいる。次女の喜美子はすでに嫁いでいる。

仏壇に飾られた孝蔵の写真。

清が線香をあげている。

その後ろでりんが泣いている。

りん「なんであんなセコな奴らにこけにされなきゃいけないのさ。父ちゃんが生きていたらただじゃおかないんだから」

清「……」

りん「お前の父親はお国のために立派に死んでいったんだよ。幼いみなしごの兄妹をかばおうとしてロシア兵に撃たれたんだってさ」

清「このあいだと言ってることが違うじゃないか。密書を届ける途中で汽車が爆破されたんだろ」

りん「親の死に方にまでケチをつけるのかい。このばちあたりが」

清「……」

郵便配達員が訪れる。

郵便配達員の声「ごめんください。美濃部さん、電報ですよ」

美津子の声「はーい」

りん「悔しい！(泣く)」

清「……」

美津子が興奮気味に部屋に入ってくる。

りんが泣いているので電報を清に渡す。

清「(読む)サッポロデマツ　サケタノム　コウゾウ……孝蔵!?」

りん「え？」

りん、清から電報を取り上げて読む。

美津子「父ちゃんだよね」

清「生きてたの？　だって母ちゃん」

りん「清、お前父ちゃんが満州で死んだって確かに聞いていたんだろ」

清「知らないよ。確かにウォッカを一気飲みしてくたばったとは聞いたことがあるよ。でもあちこちの噂、真に受けてんの母ちゃんじゃないか」

りん「清。いますぐ札幌にいってきな」

清「札幌!?　いますぐ!?」

りん「東京に来ないっていうのにはなんか理由があるんだよ。大怪我して動(いど)けなくなってるとか」

清　「札幌のどこに行けばいいんだよ」
り　ん「行けばなんとかなる。だれか知ってるんだから。どんなことをしても父ちゃん見つけ出して引っ張ってきな」
清　「札幌ったって広いんだぜ。わかるわけないだろ」
り　ん「お前それでも美濃部家の長男かい！　いつか志ん生の名前継ぐんだろ。なんとかおし」
美津子、時刻表を持ってくる。
美津子「今日23時08分に青森行きの夜行があるよ」
り　ん「まだ間に合うね。善は急げだ」
清　「ちょっと待てよ……」
りんと美津子あわてて旅支度を始める。
幼い弟の強次が家族があたふたする様をにやにやしながら見ている。
清、強次をにらみつける。強次あかんべえと舌を出す。

#汽車の中
混み合った車内。立ったまま居眠りをしている清。

#道
買い物帰りの美津子と強次。強次、美津子を置いて走り出す。
強次の前にすすだらけで汚い身なりをした男が立つ。
男　「よお」
強次、驚いて美津子のところに駆けもどる。
強　次「姉ちゃん！」
美津子、強次を抱きながら男のほうをみる。
美津子「……父ちゃん」
男は孝蔵(57)だった。
孝　蔵「達者だったか？　え？」

#美濃部家
美津子が飛び込んでくる。
美津子「母ちゃん！」
り　ん「……どうしたんだよ」
面倒くさそうに出てくるが孝蔵を見て、
り　ん「……お前さん」
孝　蔵「よお」

りん「いままで便りのひとつもよこさないで、何年も何年も……あたしゃてっきり……」
孝　蔵「むこうはいい酒がたらふく飲めるってから、のこのこついてったけれどウソばっかしだよ」
りん「この大馬鹿野郎、人の気も知らないで」
りん、孝蔵の胸に泣き崩れる。
孝　蔵「なあ勘弁してくれ。これからはみんなで仲良くやっていこう。殺し合いはもうやめにして平和で幸せで笑いにあふれた日本を力を合わせて作っていこうじゃないか。なあ、りん」
りん「はい」
孝　蔵「なあ美津子」
美津子「はい」
孝　蔵「なあ強次」
強　次「はい」
孝　蔵「喜美子は？」
りん「嫁に行きました」
孝　蔵「まだ戻ってこねえのか」
りん「いやですよ」
孝　蔵「そうだ、違えねえ。家族揃って……あれもう一人いなかったか？」
りん「清を忘れていますよ」
孝　蔵「ああ、あのクソ生意気な坊主、親が命がけで帰って来たってのにどこほっつき歩いてやがる」
りん「清は今……」
孝　蔵「ああ！」
奥の部屋の仏壇をみつける。
孝　蔵「清、お国のために立派に散ったのか。海軍になりたいって言ってたっけな。父ちゃん全然知らなかった。許してくれ。この通りだ」
美津子「違うよ父ちゃん」
りん「清は生きてますよ。元気ですよ。お前さんを迎えに札幌に行ってるんですよ」
孝　蔵「じゃあ、誰の仏壇だ？」
りん「それは……」
孝　蔵「ああ！」
自分の写真が飾られているのに気づく。
孝　蔵「こりゃ俺の仏壇かい？」
美津子「ええ、まあ……」

りん「でもね……」
孝　蔵「(仏壇の写真をさして)俺は死んじまったってなると、(自分をさして)この俺はいったいどこの誰なんだい？」
長屋の連中がやってくる。
住人Ａ「師匠、帰って来たんだって？」
住人Ｂ「よく生きてたねえ」
孝　蔵「よお、みんな。あいかわらずヒキガエル踏んづけたような面しやがって。目がへんなところについているから後ろ向きにならなきゃ見えねえだろ」
住人たち、笑う。
住人Ｃ「(一升瓶を持って)ほら、もって来たよ」
孝　蔵「おお！　いいねえ。さあみんな上がっとくれ」
長屋の住人たちが続々と遠慮なしに部屋に上がってくる。

#北海道、とある店先
激しい雪の降る田舎町。
清が店の老主人に道を聞いている。
清　「港へはどういけばよろしいのでしょうか」
老主人「この道をまっすぐいけば着きますが、まだ二里以上はありますよ」
清　「ご親切にありがとうございます」
去っていく清。
後ろ姿を見送る老主人とその妻。
老主人「行方不明になった父親を探して、北海道中をまわっているそうだよ」
その妻「親孝行な人ですねえ」

#同、道
吹雪の中を歩いていく清。

#美濃部家
孝蔵を中心に長屋の住人たちが酔っ払って騒いでいる。

#タイトル
「おやこばからくご」

#なめくじ長屋、夜
昭和二十六年。

住人たちが次々と美濃部家に入っていく。

#美濃部家

ふすまをはずした二部屋に住人たちがラジオを囲んで所狭しと座っている。
客にお茶を出しているりん(51)と美津子(27)。
部屋のすみで友だちとふざけている強次(13)。
清(23)、時間を確認するとラジオのスイッチを入れる。
アナウンサーの声「『なごやか寄席』の時間です。本日は人形町末広より古今亭志ん生さんによる『権兵衛狸』をお送りします。最後までごゆるりとお楽しみください」
ラジオから流れ出す出囃子「一丁入り」。

#寄席、高座

登場する孝蔵(61)。
大きな拍手に迎えられる。
テロップ「古今亭志ん生」

#美濃部家

住人たち、大きな拍手と歓声。
孝蔵『権兵衛狸』を演じ始める。
真剣に聞き入っている住人たち。
孝蔵の声「狐七化け、狸八化けと申しますが、狸の化け方は狐とは違いまして他愛のないいたずらだと言われております。王子の在の権兵衛さんの家に、夜になると『どんどーん権兵衛、どんどーん権兵衛』と毎日やられますから権兵衛さん眠れない……」

#某家

若い妻と幼い子どもたち、笑う。仏壇に夫の写真。
孝蔵の声「権兵衛さん、ある晩待ち伏せして『どんどーん権兵衛』とくるやいなや、ガラっと戸をあけたら狸だった。「こんちくしょうめ」権兵衛さん取っ組み合いの末に捕まえて、土間の上に吊るしておきました」

#道

ラジオを囲んでいる戦災孤児たち、笑う。
孝蔵の声「『今日は殺さねえで逃がしてやるだ。さんざん世話焼かせた父っつぁ

まの命日だからな。そのかわり毛を刈り取ってやるだ』そういってチョキチョキチョキチョキチョキチョキチョキチョキチョキ刈りはじめた。『頭の毛も刈ってやる』チョキチョキチョキチョキチョキチョキチョキチョキ」

#道

街角から流れるラジオに耳をすませる人々。輪の中には傷痍軍人や街娼が紛れている。

志ん生の落語を聞いて笑う。

孝蔵の声「しかし翌日になると再び『どんどーん権兵衛さん、どんどーん権兵衛さん』『あんちくしょう、また来やがった』戸をがらっとあけると、狸が自分から飛び込んできた……」

#美濃部家

孝蔵の声『またお前えか。なんだって来たんだ』『へへへ、今夜ひげをやっておくんなせーな』

笑い転げる住人たち。ラジオにむかって拍手をする。

住人たちを見ている清。

清にテロップ「古今亭志ん朝改め　古今亭志ん橋」

#同、外

満足そうに帰っていく長屋の住人たちに「おやすみなさい」などと声をかけながら見送る美濃部家の人々。

強　次「あんちゃんもいつかは父ちゃんみたいな人気者になるんだろ」

清　「馬鹿言っちゃいけねえよ。誰があんなふうになるもんか。強次も大人になったら噺家になるか」

強　次「俺ね、役者になりたいんだ。それがだめなら外交官。誰にも言っちゃだめだよ」

清　「そりゃいいや。噺家なんて碌なもんじゃねえぞ」

#寄席、楽屋

桂文楽(59)が若手の落語家たちに志ん生の悪口を言っている。

テロップ「桂文楽」

文　楽「そりゃ志ん生にはフラがあるから何十回にいっぺんぐらいはマシなものがあるかもしれませんがねえ、根がぞろっぺえだからしくじったら目も当てられない。お前さんたちくれぐれもあんなの真似すんじゃありませんよ」

孝蔵が入ってくる。
文楽、悪口をやめる。
孝蔵、文楽の隣に座る。

文　楽「孝ちゃん、お疲れさま。あいかわらず大うけですねえ。あんたの後じゃやりにくくってしょうがありませんよ」

孝　蔵「黒門町の旦那におほめの言葉を受けるたあ光栄だねえ。さあ、お客様が真打を待ってるよ」

文楽、腰を上げて楽屋から出て行く。

孝　蔵「(みはからって)あの助平、また新しい女(レコ)作ったんだって？　やだやた。(文楽の口調を真似て)『どうもあべからべっそんなことで』ってわけわんねえや、なあ」

笑う若手落語家たち。

#呉服屋

店員がりんと美津子に生地を見せている。

美津子「これ素敵じゃない。母ちゃんこれにしなよ。似合うよ」

り　ん「そうだねえ……ちょっと派手すぎやしないかい？」

離れたところから番頭が、地味な服装のりんと美津子をなめるように見ている。

＊　＊　＊　＊

番頭がりんと美津子の背中から声をかける。

番　頭「あのお、奥様」

り　ん「……」

番　頭「こちらの生地はいかがでしょうか。たいへんお求め安くなっておりますが」

り　ん「……お前さん、あたしを誰だと思ってるんだい？」

番　頭「は？」

り　ん「バカにすんじゃないよ。あたしは古今亭志ん生の女房だよ。この店で一番高い生地持っといで」

番　頭「申し訳ありません」

走り去っていく番頭。

#美濃部家、居間

孝蔵、りん、美津子、清、強次。

新しい着物を着て得意顔のりん。

美津子「いいわよ。ねえ」
強　次「母ちゃんきれい」
り　ん「そうかい？」
清　　「また無駄遣いして。うちはそんなに裕福ってわけじゃねえんだぜ」
り　ん「ほんとにこの子は野暮だよ。ねえ」
美津子「いいじゃないか。母ちゃんいままでさんざん苦労したんだから。父ちゃんが納豆売って、母ちゃんが内職して、清だって覚えてるだろ」
孝蔵、りんに見とれている。
り　ん「なんだいお前さん……」
美津子「父ちゃん惚れなおしたんだ」
り　ん「いやだよ、じっと見たりしてさ」
孝　蔵「……きれいなもんだね」
りん照れる。
はやしたてる美津子、清、強次。

#美濃部家、前の道
翌朝。
りんが掃除している。

#美濃部家、奥の和室
孝蔵、部屋に入ってくる。りんが外にいるのを見計らいたんすをあけ、りんの着物をまじまじと見る。
孝　蔵「きれいなもんだね」

#質屋、外観

#同、店内
孝蔵、りんの着物を広げる。
孝　蔵「きれいなもんだろ」
質　屋「これはいい着物ですねえ」
孝　蔵「たあんと出してくれよ」

#吉原、仲の町
遊郭の並ぶ通りを闊歩する孝蔵。
あちこちの引き手茶屋から牛太郎たちが「師匠！」と呼びかける。

#踊りの稽古場(坂東流)

数人の弟子たちとともに清が踊っている。
弟子の中には治子(20)がいる。
治子、清の華麗な踊りに見とれる。

#同、外

稽古を終えた弟子たちが三々五々散っていく。
去っていく清。
少しはなれて治子が清と同じ方向に歩いていく。

#道

通りを歩く清。
少しはなれて歩く治子。
清、曲がり角を細い路地に入る。
春子も同じ方角に曲がる。

#路地

治子の前を歩いている清。
治子、あたりを見回す。誰も人がいない。
走り出す治子。
からんからんと下駄の音。
清、左手を斜めに上げる。
治子、清の手に飛び込むようにつかむ。
清、春子を見て微笑む。

治　子「歩くのが早すぎます。いじわる」
フフフと笑う清。
握られた手と手。

#道

清と治子、古本屋の前を通りかかる。

清　「ちょっといいかい」
店の中に入っていく清と治子。

#古本屋、店内

店主が清と治子をちらっと見る。

清、円朝全集を取る。

清　「この本が売れちまわないか心配でしょうがないんだ」

治　子「『三遊亭円朝』」

清　「知ってるかい。円朝師っていうのは……」

治　子「(さえぎって)江戸時代末期から明治時代にかけて活躍した名人で、作者としても、『牡丹燈籠』『真景累ヶ淵』『芝浜』などの名作をたくさん残し、近代言文一致日本語の祖として日本文学にも多大な影響を与えた人」

清　「……」

治　子「それぐらいのことは私でも知ってます」

清　「俺たち噺家はねえ、幼稚園の前を通るだけで足がすくんじまうんだ」

治　子「……？」

清　「エンチョウ先生がいるからね」

治子ふふふと笑う。

店主もくすりと笑う。

清　「あと一ヶ月勤めたらこれは俺のものになる」

店を出て行く清と治子。すれ違いに学生服を着た男が入ってくる。

古本屋「……」

#河原

治　子「あといくらためたらあの本買えるんですか」

清　「あと八十円ほどだけど、どうしてそんなことを？」

治　子「それぐらいのお金だったら私の貯金を崩せば用意できます」

清　「余計な心配しなくてもいいよ。後一ヶ月我慢すれば買えるんだから」

治　子「その一ヶ月遊んで暮すんですか」

清　「別に遊ぶわけじゃ……」

治　子「お金は来月返してくれればいいんです。そうすればその一ヶ月余計に稽古できるじゃないですか。清さん、いつか志ん生の名前を継ぐんでしょ。だったら無駄にできる時間なんてないんじゃないんですか」

清　「はるちゃん……」

治　子「お金は明日お渡しします」

#道

走る清。古本屋に駆け込む。

#古本屋

あった場所に円朝全集がない。
清　「え？」
清、あちこちの棚を探すがみつからない。
清　「あれ？」
古本屋「何かお探し？」
清　「ここにあった円朝全集は？　どっか移動したんですか？」
古本屋「あれは売れちまったよ。ちょうど昨日あんたが帰ったすぐ後だった。早稲田の落研だってよ」
清　「そんなせっかく金用意できたのに……」
古本屋「なんだ、あんた本気で買うつもりだったのかい」
清　「当たり前だろ。ためるのに何年もかかったんだぜ」
古本屋「そいつは気の毒にな。(店の奥に引っ込む)こっちも商売だから悪く思わないでくれよ。代わりと言っちゃなんだがなあ。こういう本があるんだけど」
店主、持ってきた本を台の上に置く。
清　「それは……」
台に置かれた美品の円朝全集。
古本屋「しっかり勉強しとくれよ。未来の志ん生さんよ」

#美濃部家
本を抱えて帰ってくる清。
泣いているりん、慰めている美津子。
清　「なんだい。まだ帰ってこないのかい」
美津子「もう三日目よ」
清、奥の和室に逃げていく。

#同、奥の和室
文机に円朝全集第一巻のポージを開く清。本に顔を近づける。
紙の匂いをかいでうっとりする。
りんの声「くやしい～！」
本に没頭する清。

#美濃部家、前、夜中
草木も眠る丑三つ時。あやしい人影がひとつ美濃部家に近づく。
そおっと裏口をあけて中に入っていく。

#同、台所

音を立てないように忍び込む男。そのとき……。

ポカリと頭をたたく音。

孝蔵の声「いててててて」

ドタドタと争う音。

孝　蔵「待っとくれ。誤解だ。俺だよ。お父様だよ」

清　「わかってら。いままでずっと吉原（ちょーまい）か」

あかりがつく。

清　「母ちゃんの大切な着物どうしたんだ」

孝　蔵「質屋がどうしても貸してくれってしつこいんだよ。俺ア嫌だって言ったんだよ」

清　「ふざけやがって……」

清、孝蔵をつかまえようとする。逃げる孝蔵。

りん、美津子、強次が起きてくる。

美津子「清、やめて」

三人であばれる清を押さえつける。

離された孝蔵、苦しそうにぜいぜい激しく息をする。

りん「もういいからね」

清　「いいかげんにしろよ！」

一　同「……」

清　「飲む、打つ、買うは芸の肥やし。そりゃそうだろ。でも超えちゃいけない一線ってもんがあるんじゃないかい。お他人様は言うよ。『御宅のお父様はおもしろい方でよござんすね。さぞかし笑いの絶えないおうちなんでしょ』冗談じゃねえ」

孝蔵、神妙に聞いている。

清　「戦争中もそうさ。俺たちみんな置き去りにして一人気楽に満州くんだりまで逃げやがって。あのとき東京がどんな状態だったかちったあ考えたことがあるのか。狭い防空壕の中で知らない人と身を寄せ合いながら、いつ頭の上に爆弾が落ちてくるかもしれないって震えていたんだぞ。そんなときにおやっさんは毎日のんきに酒かっくらってたんだ。恥ずかしくないのかよ。一生に一度ぐらい父親らしいことしやがれってんだ」

しんみりしているりんと美津子。

強　次「お父ちゃん、聞いてないよ」

清　「え？」

グオーといびき声。

孝蔵、寝ている。
清　「……だめだ。こりゃ」

#美濃部家、奥の和室
『干物箱』の稽古している清。
清　『道楽と言えば飲む打つ買う。……』

#同、はばかり
座って大きいのをしている孝蔵。
清の声『買うという道楽は今はなくなりましたが』
孝　蔵「ちがうよ」

#同、奥の和室
やりなおす清。
清　「……『えー、道楽と言えば飲む打つ買う。……』
孝蔵の声「ちがうよ」
清　「……」

#縁側
きせるをふかしている孝蔵。
清の声「……『えー、道楽と言えば飲む打つ買う。……』
孝　蔵「ちがうよ」
清の声「……『えー、道楽と言えば飲む打つ買う。……』
孝　蔵「ちがうよ」

#同、奥の和室
やりなおす清。
清　「……『えー、道楽と言えば飲む打つ買う。……』
孝蔵の声「ちがうよ」
清　「……『えー、道楽と言えば飲む打つ買う。道楽という道楽は今はなくなりましたが、はじめて吉原にいくときは足がすくんだりすることもありますが、一度行っちゃうと夢中になるんですね。商売もそっちのけで止まらなくなる。』」
反応がない。清、先を進める。
清　『そして親御さんは心配になって、若旦那を二階に押し込めちゃいました。一日中降りてこない』

(父親)『(二階にむかって)おーい、孝太郎や』
(孝太郎)『(消え入るようなこえで)……ふぁーい』
(父親)『一日中部屋に閉じこもっていては、体に毒だろう。ひとつ気晴らしに銭湯にでも行ってくるか』……」
なにかおかしい。
おそるおそる障子を開ける。
縁側で孝蔵、居眠りをしている。
清、大きな音を立てて障子をしめる。

#同、縁側

昼寝から目覚める孝蔵。
履物を履いて外に出て行く。
買い物帰りの美津子とすれ違う。
美津子「おとうちゃん、どこ行くの?」
孝　蔵「散歩だよ」
出て行く孝蔵。

#道

を歩く孝蔵。
すれ違う人々が挨拶をするが無愛想に答えるだけ。
ぶつぶつと『干物箱』の稽古を始める。
孝　蔵「(父親)『(二階にむかって)おーい、孝太郎や』
(孝太郎)『(消え入るようなこえで)……ふぁーい』
(父親)『一日中部屋に閉じこもっていては、体に毒だろう。ひとつ気晴らしに湯にでも行ってくるか』
(孝太郎)『(急に元気になって)へえ!　お父っつぁん!　よろしゅうございますか。ではいってきます』
(父親)『ちょ、ちょ、ちょっと待った。何も持たずに湯に行くやつがあるか。お前はいったん外に出ると帰ってくるのを忘れちゃう。三十分やろう。それ以上遅れたら承知しないよ』……」
歩いていく孝蔵。
＊　＊　＊　＊
子どもたち「志ん生がきた」と後をついていく。
孝蔵、子どもたちを追い払う。
子どもたち、最初は散るものの、すぐに戻ってきて孝蔵の後をついていく。

孝　蔵「(孝太郎)『いくら早い車だって片道十五分。むこうへ行って、『花魁来たよ』『あら若旦那』『さいなら』……つまんねえな。……そうだ。なにも俺がいなくたって、二階に誰かいりゃいいんだ。金公は声色がうまいよ。あいつを放りこんでおこう』」

子どもたち、受けて笑う。

＊　＊　＊　＊

大人も志ん生を見つけると後をついていく。

孝　蔵「(金公)『(若旦那の声色を真似て)お父っつぁん、ただいま戻りました』

(父親)『おお、早かったね。湯冷めしちゃいけないよ。早く寝な』

(金公)『おやすみなさいまし』

(父親)『ああ、おやすみ』

(金公)『(独白)どうだい。うまいもんだろ。ころっとだまされやがった』

＊　＊　＊　＊

人々は孝蔵を見つけるとその後をついていき、聞き耳を立てる。

孝　蔵「(金公)『いい部屋だね。なにも花魁の汚い部屋に行くこたねえんだよ。お、鍋やきがことことことこと、いいねえ。酒がある。嬉しいね。これをいただいてね。(酒を飲む)牛もよく煮えてるね。(ふーふーとさまして食べる)いいダシがきいてるよ。いい酒に食いもんがあって布団があって、これで十両もらえて……』」

人々の輪はだんだん大きくなっていく。

＊　＊　＊　＊

町中の人々が志ん生のうしろについていく。

孝　蔵「(父親と金公、二階と二階で会話をする)

(父親)『孝太郎や、今日神田のおばさんが来ただろ』

(金公)『(独白)知らないよ。そういうことは教えといてくれなきゃ……来ました』

(父親)『なにか頂き物があっただろ』

(金公)『……ありました』

(父親)『なにをもらった』

(金公)『……”#&$%!()をもらいました』

(父親)『何を言っているんだ。干物のようなものかい』

(金公)『そうです！　干物です！』

(父親)『なんの干物だ』

(金公)『……お魚の干物です』

(父親)『そりゃ魚だろうよ。なんの魚だい。大きい魚か』

(金公)『はい、まぐろの』

(父親)『あたしをからかっているのかい。もっと小さいだろう』
(金公)『ええ、どしょう』
(父親)『なにをふざけているんだ。アジとかじゃないのか』
(金公)『そうです！　アジです！』
(父親)『どこにあるんだ』
(金公)『箱の中です。干物箱』
(父親)『うちにそんな箱はないよ。ちょっと持ってきて見せとくれ』
(金公)『お父っつぁん、お腹が痛くなりました。動(いご)けません』
(父親)『それはいけないな。お父っつぁんに見せてごらん』
(金公)『(独白)まずいよ。あがってきちゃったよ。逃げ道は・・・・・逃げるとこぐらい教えといてくれなきゃ。仕方ない。布団でもかぶって・・・・・』
(父親)『孝太郎や。薬を持ってきたよ(部屋に入ってくる)・・・・・おまえ汚い足だね。本当に湯に行ったのかい。あ、般若(はんにゃ)の面が彫ってある。親にもらった体に傷をつけやがって(ふとんをはぐ)おまえは、金さん！』
(金公)『こんばんは、お父っつぁん』
(父親)『いつあたしがお前のお父っつぁんになった！　ははあ、さてはうちの馬鹿に頼まれて・・・・・』
(金公)『ええ、お宅の馬鹿に頼まれまして』
(窓をたたく音)どんどん、どんどんどん。
(孝太郎)『(外から)おい、金公！　財布を忘れた。棚にあるから放っとくれ』
(父親)『ったく情けねえ奴だ・・・・・(孝太郎に怒鳴る)馬鹿野郎！』・・・・・」
孝蔵の後ろに大集団。
孝蔵がなにかいうたびに大爆笑。

#寄席、高座
『干物箱』を演じている孝蔵。
孝　蔵「(孝太郎)『さすが金公はうめえな。親父そっくりだ』」
笑い転げる観客。
客の中には治子もいて大笑いしている。
舞台袖で見ている清。
笑う治子を見つめる。
終わると割れんばかりの大拍手。

#喫茶店

代用コーヒーを飲んでいる清と治子。
治子、思い出し笑いをする。

清　「なんだい、そんなに面白かったのか」
治　子「志ん生さんって出てくるだけでおかしくって」
清　「……」

#美濃部家、奥の和室

強次、おもちゃで遊んでいる。
りん、ぬいものをしている。
清、本棚を見る。

清　「あれ？」
　本がない。
清　「母ちゃん、俺の円朝全集知らない？」
り　ん「あたしゃ食べないよ」
清　「金魚じゃねえんだから」
　りんと清、思い当たる。
り　ん「……まさか」
清　「だよな……おい強次、あんちゃんの大事な本知らねえか？　このあいだ買ってきたやつ。ぶ厚くて」
強　次「ぶ厚くて？」
清　「表紙がかたい紙で」
強　次「表紙がかたい紙？」
清　「同じようなのが何冊もあって」
強　次「同じようなのが何冊もあって？」
清　「ああもうじれってえな。わかんねえか」
強　次「春陽堂三遊亭円朝全集全十三巻」
清　「わかってんだったらさっさと言え」
強　次「父ちゃんがどっか持ってった」
清　「どっか持ってった？……クソオヤジ」

#遊郭

三味線に合わせて、孝蔵、文楽、遊女たちが楽しそうに踊っている。
F・O

#美濃部清の家、前の道

F・I

昭和三十二年秋。

小さな一軒家から清(29)とそのうしろからねんねこに志津子(2)をおぶった治子(26)が出てくる。

清にテロップ「古今亭志ん橋改め　金原亭馬生」

治子、清の背中から火打石を打つ。

治　子「いってらっしゃい」

清　「ああ、行ってくるよ」

去っていく清。

後ろ姿を見送る治子。

清が振り向いたのか、治子小さく手を振る。

清の家から一軒おいた大きな家が孝蔵の家である。

孝蔵の家から美津子が出てくる。

美津子「ああ、治ちゃん」

治　子「お姉さん、おはようございます」

美津子「ちょうど良かった。パトロン(おだん)からおみやをたくさん送ってもらったんだけど、うちじゃ食べ切れなくて、ちっと持ってってくれない」

治　子「ありがとうございます」

治子、美津子の後について孝蔵の家に入っていく。

#孝蔵の家

孝蔵の家では内弟子たち数名が掃除をしている。

治子、弟子たちに「おはようございます」などとあいさつを交わしながら中に入っていく。

#同、台所

りん、大きな袋に果物や野菜をめいっぱい詰め込んでいる。あっけにとられている治子。

り　ん「ああ、そうそう」

冷蔵庫から数匹さんまを取り出してにおいをかぐ。

り　ん「まあ大丈夫だろ」

さんまも袋に入れる。

り　ん「治ちゃん、将棋盤いらない？　かやの高級品があるんだよ」

治　子「将棋は指しませんから」

りん「そお。最近お父ちゃん将棋ばっかしでろくに稽古もしないんだもの。どっかやっちゃいたいんだけどね……いっそのことお父ちゃん持ってかない？」

りん「……」

りん「いらないか」

二階から強次(19)の声が聞こえてくる。『道灌』を稽古している。

治子「強次さん、結局噺家になるんですか？」

りん「父ちゃんは後継がせたくって仕方ないんだけどね。本人はどうなんだろ」

治子「いい声ですね」

天井を見上げる治子。

#同、二階の十畳間

強次『道灌公があばら家をみつけ雨具をと所望すると、賤の女は、お恥ずかししゅうございます、といいながら山吹の枝を差し出した……』

#寄席

前座B、強次にから太鼓のたたき方を教えている。

前座B「一番太鼓は『どんどんどんとこい、金持って来い』って叩くんだ」

前座B、一番太鼓を叩く。

前座B「二番太鼓は締太鼓、大太鼓、能管が入って『お多福来い来い、ステツク天天』」

前座B、二番太鼓を叩く。

前座B「そして最後のハネ太鼓は『出てけ、出てけ』」

前座B、ハネ太鼓を叩く。

前座B「わかったかい？　やってみろよ」

清「なんだい簡単じゃないか」

清、長バチを持って一番太鼓を叩く。

前座B「……おっ、なかなかやるじゃねえか」

#同、楽屋

酒に酔った春梅亭浮草が入ってくる。

浮草「あ、いたいた」

浮草、清に近づいてくる。清、無視する。

浮草「あたしゃつくづく思うんだが噺家ってのは気楽な商売だね。一度真打になったらどんな下手くそ人だって、食っていけるんだから」

清、浮草を無視する。

浮　草「長年噺家やってるけれども、お前さんほどひどい噺家みたこともない。あんたの落語を聞かされるのは拷問だね」

清　「師匠、酒がちっと過ぎるんじゃないですか」

浮　草「酒と落語は関係ないでしょ。あたしが素面だったらお前さんの落語がうまくなるっての？」

強次が後ろからやってきて浮草の耳を思い切り引っ張る。

浮　草「痛てててて！　なにすんだてめえ！」

強　次「やいやい、あんちゃんに喧嘩売るってんなら、おいらが相手になってやらあ。もう一ぺん言って見やがれ！」

言い返せない浮草。

前座Ｂが飛んでくる。

前座Ｂ「おい、何やってんだ。お前えの出番だぞ」

前座Ｂに肩を押されて去っていく強次。

#同、高座

さらくちに登場する強次。

まばらな拍手。

ものを食べる人、新聞を読む人、歩き回っている人。

空席も多く、前座の話に耳を傾ける人は少ない。

強　次「えー」

つやのある声が響き渡り、客たちの注意を引く。

『猫の皿』を始める

強　次『『端師（はたし）という商売がございまして、全国を旅して回っては旧家の蔵なんかに入れてもらます。そこで古道具の掘り出し物を探しだすと、それを安く売ってもらって、それを江戸に持ち帰って利ざやを稼いでおりました……』

テロップ「古今亭朝太」

#同、舞台袖

心配そうに見ている清。

#同、高座

常連Ａ「おい、あいつ志ん生の息子じゃねえか」

常連Ｂ「ちゃんと聞いとかなきゃ」

観客たち、動作をとめて強次に注意を向け始める。

強　次『『ほんとについてなかったな。収穫はなにひとつありゃしねえ。驚いたね。これほどなにもないことも珍しいよ。旅費がまるまる赤字じゃねーか。ああ茶店があるよ。ちょうど小腹もすいきたことだし、ちょっと一服していくか……』

観客たち、次第に強次の話に引き込まれていく。

#茶店(イメージ)

(イメージシーンの登場人物はすべて強次が演じる)

きたない店。下は雨でぐちゃぐちゃ。

端　師「それにしてもひどい店だね」

店主であるよぼよぼのおじいさんがお茶と団子を置いていく。

出されたお茶を飲む。

端　師「ぬるっ」

団子を食べる。

端　師「まずっ」

見ると数匹の猫が餌を食べている。

端　師「食い物を扱う店に畜生なんか置いておくかねえ、普通。俺は子どものころ飼ってたにわとりが野良猫に殺されて以来、猫ってのがでっ嫌えなんだ。ほんとに気分悪くてしょうがねーや」

一匹の猫が近寄ってくる。

端　師「てめえに食わせるものなんかねえんだよ。あっち行け。……おや」

猫の皿を見る。美しい文様。

端　師「ありゃ絵高麗の梅鉢だよ。驚いたね。五枚揃いだったら二千両、ばらでも三百両はくだらない品だよ。そんなのを猫の餌なんかに使って、知らねえたあ恐ろしいねえ……(目がキラリ)そうだ!……おやじ」

端師、猫を抱く。

おじいさんがやってくる。

おじいさん「なんでございましょう」

端　師「この猫なんだけどね。どうも俺になついちまって。俺もこう見えても動物が嫌いじゃねえんだよ。どうだろう、こいつを譲ってくれねえかな」

おじいさん「あたくしもばあさんを亡くしましてからこの子たちを自分の子どものようにかわいがっているのでございます。どうぞご勘弁を」

端　師「一人旅ってのも寂しくてしょうがないんだ。猫でも一緒ならどれだけ慰められるかわからねえ。じゃあこうしよう。三両出すよ。それでこいつを売っとくれ」

端師、おじいさんに三両を渡す。
おじいさん「さようでございますか。くれぐれもかわいがってやってください
ね」
端　師「餌をやんなきゃいけねえからな、この皿をもらっていくぜ」
おじいさん「お皿でしたら奥からお碗をもってまいります」
端　師「食いつけねえものじゃなきゃいけねえだろ。猫ってのは意外に神経質
なもんだからな」
おじいさん「このお皿はだめなのでございます。なにしろ絵高麗の梅鉢と申し
まして、五枚揃いだったら二千両、ばらでも三百両はくだらない品なの
でございますもので」
端　師「え⁉　……知ってたの？」
おじいさん「はい」
端　師「じゃあ、お前え、なんでこんな高価なものを猫の皿に使っているんだ
よ」
おじいさん「こうしておきますとな、どういうわけか、時々(目がキラリ)……」

#高座
強　次「猫が三両で売れるのでございます」
会場大爆笑。
深く頭を下げる強次。
大きな拍手。

#同、舞台袖
強次戻ってくる。
強　次「あんちゃん、どうだった？　俺の噺。よかっただろ」
清　「ああ、まあまあじゃねえのか」
強　次「ご褒美に寿司のひとつでも奢っとくれよ」
強次、楽屋に入っていく。
席亭が近寄ってくる。
席　亭「あれが古今亭の秘蔵っ子かい。なかなか筋がいいじゃないか」
清　「いえ。まだまだですよ」
強次、荷物を持って楽屋からこっそり出てくる。帰ろうとして
いるのだ。
清　「おい、どこにいくんだ？」
強次、シーっと指を立てる。
強　次「前座が五人も六人もいてもしょうがないよ。烏合の衆じゃないんだか

ら」
清　「まだやることたくさんあるだろ」
強　次「次からちゃんとやるからさ、今日だけどうしても勘弁。外に(小指を立てて)コレ待たしてんだよ」
清　「おい！」
　去っていく強次。

#孝蔵の家
　昭和三十六年。
　孝蔵(71)と清(33)、二人ともコップ酒を飲んでいる。
　孝蔵のコップは空だが、清のはまだ半分以上残っている。
孝　蔵「あれは俺が長年かかって磨いてきた噺だ。めちゃくちゃにすんじゃねえよ」
清　「でもおやっさん、実際の火炎太鼓っていうのは重いんだぜ。大八車でも使わないととてもじゃないけど運べないよ」
孝　蔵「両手でどんどんやりながら歩くからおかしいんじゃないか」
清　「おかしかったらでたらめなことやってもいいのかよ」
孝　蔵「おめえは全然落語がわかってねえよ。噺家なんてやめちまえ。やめて一生浪人生でもやってろ」
清　「……」
　酒を一口飲む。
孝　蔵「一杯飲むのに三日も四日もかけるつもりかい。まったくじれったくてしょうがねえや。さっさと自分の家に帰(けー)りやがれ」
　清立ち上がって出て行く。

#寄席、高座
　『火炎太鼓』を演じている清。
　太鼓をリアカーで引くという演出。
清　『ああ、うるせえかかあだね。ああいあのは図々しいから生涯うちにいるよ。いやならどこへでも行きやがれ。女なんてその辺にいくらでもいるんだよ。ホントにたたき出すぞ。(屋敷に着いた)こんちは』
　門番と道具屋の会話。
清　「『なんかへんな奴が来たな……そのほうは大層威勢のよいやつだな』『道具屋でございます』『おお道具屋か。今達しがあった入れ』……」
　あくびをする客。いねむりをする客。みんな退屈そうに聞いて

いる。
ヒソヒソ話をする常連客AとB。
常連A「オヤジのいいところ全部弟に持っていかれちまったな」
常連B「あれで志ん生の名前継ぐ気かよ」

#遊郭
落語家たち数人が遊女たちと歌い踊っている。
清、ひとりだけ酒を飲んでいる。
遊女A「なに浮かない表情してるんですか。おひとつどうぞ」
清、酒を受けて飲む。
遊女A「馬生師匠って朝太さんのお兄さんなんですって？　あたし大ファン。『若い季節』見てるんですよ」
清「そうですか。強次も喜ぶでしょう」
清、落語家Fを呼び寄せて廊下に連れて行く。

#同、廊下
清「悪いけどさ、俺帰るよ」
落語家F「これからいいところじゃないの。野暮なこと言わないでよ」
清、金を渡す。
清「これで勘弁してくれよ。みんなによろしく言っといてくれ」

#清の家
清「ただいま」
奥から出てくる治子。（30）
治子「おかえりなさい。早かったんですね。みんなと喧嘩でもしたんですか？」
清「そんなんじゃねえよ」
治子「ちょうどごはん食べてたんです。お腹すいてます？」
清「ちょっとだけもらおうかな」

#同、食卓
6歳の志津子を筆頭に三人の幼い娘がいる。
治子、ごはんと味噌汁を清に出し、自分の干物を半分箸で割って清に出す。
治子「食べてくると思ったんでこんなのしかありませんけど」
清「いただきます」
一口食べる。

治　子「おいしい？」
清　「ああ」
清、皿を持って治子の隣に来ると、おもむろにひざの上に寝転ぶ。
清　「食べさせてよ」
治　子「あら、赤ちゃんがひとり増えちゃいました」
治子、干物を小さく切って清の口に入れてやる。
治　子「はい、清ちゃん」
清、口をあけて食べる。

#寄席、外

激しい雨。

#同、高座

強次(23)が『牛ほめ』を演じている。
父親が与太郎に新築したおじさんの家のほめ方を教えている。
強　次「(父親)『家は総体檜づくりでございますな』
(与太郎)『家は総体ヘノコ作りでございますな』
(父親)『畳は豊後の五分べりで』
(与太郎)『畳は貧乏でボロボロで』
(父親)『左右の壁は砂摺りでございますな』
(与太郎)『左兵衛のかかあは引きずりで』
場内は志ん朝を見に来た客で一杯。
＊　＊　＊　＊
強　次「(父親)『牛も買ったっというからそいつもほめておくんだよ』
(与太郎)『あたい牛のほめ方なら知ってるよ。牛は総体檜づくりでございますな』
(父親)『ばかやろう』……」
場内大爆笑。

#同、楽屋

孝蔵と文楽が将棋を指している。
文楽、一手指す。
高座のほうから強次の声と観客の笑い声が聞こえてくる。
孝　蔵「ちょっと待った」
文　楽「往生際の悪い方ですね。どうあがいても寄ってるでしょ」

孝　蔵「あ、いい女」
文　楽「え？　どこ？」
文楽振り向くと三味線奏者の老婆が通りすぎる。
孝蔵、そのすきに盤上の駒をささっと動かす。
文　楽「いい加減なこといいなさんな。日暮里もついに耄碌しましたか」
孝　蔵「じゃあ、仕方ない。首を差し出しましょう」
孝蔵指す。
文　楽「……あれ!?」
盤面を見る文楽、考え込む。
大きな拍手が聞こえる。
強次が戻ってくる。
強　次「お先に勉強させていただきました」
落語家たち「お疲れ様でした」などと声をかける。
強　次「父ちゃん、お先」
孝　蔵「おう強次、まあちょっと座れや」
強　次「なんだよ、よかっただろ。客にも受けてたしさ」
孝　蔵「ああ、よかった、よかった」
強　次「じゃあいいじゃないか。気持ち悪いな」
孝　蔵「確かに悪かねえんだよ。でも今日のお前えのは芸じゃない。商売だ」
強　次「商売？」
孝　蔵「商売でもいいんだよ。毎日毎日芸を見せてちゃ、こっちの体が持たねえやなあ。でも今夜の客はどしゃ降りの中わざわざ足を運んでくだすった根っからの落語好きばかりだ。そんな人たちには本当の芸を見せてあげなきゃいけないよ」
前座C、孝蔵を呼びに来る。
前座C「志ん生師匠、そろそろお願いします」
孝　蔵「あいよ」
孝蔵、楽屋から出て行く。
将棋盤を睨みつけ考え込んでいる文楽。

#同、高座
演じる孝蔵。『お直し』
孝　蔵「涙が出るようなご主人の扱いで、情夫（まぶ）がいるなら添わしてやろう。ふたりを一緒にしてすぐ近所の小さな家（うち）を借りて、今度は花魁をやめてそ

の家ではたらくようになりました。ところが亭主が博打に手を染めて、あっというまに一文無し……」

＊　＊　＊　＊

孝　蔵「(女房)『ちょいと、あたしゃお前さんの女房だよ。けころなんかできるかね』

(亭主)『できるかねって、いままでさんざんやってきたじゃねえか。ちょいとの間だけ我慢してやってくれえな』

＊　＊　＊　＊

(亭主)『(とおりがかった人に)ねえ、あのねえ……ああ行っちゃったな』

(女房)『当たり前だよ。たもとなんかに手入れちまいなさいよ』

(亭主)『破けちゃうよ』

(女房)『破けたっていいよ。むこうの着物なんだから。もう、そんなんでけころなんかできるものかね』

＊　＊　＊　＊

(客)『どうしてこんなとこに来たんだ』

(女房)『お金のため』

(客)『そりゃそうだ。金のためでなきゃ、こんなとこへ来やしねえやな。いくらで身を沈めたんだ』

(女房)『三十両』

(客)『三十両ありゃ、お前の体自由になるのか？　じゃあ明日持ってきてやる。俺と夫婦になるか。どうだい？』

(亭主)『(外から大声で)直してもらいなよ。お直しだよ』

#同、舞台袖

孝蔵を見つめる強次。

#ホール、全景

長蛇の列。

強次の写真と「古今亭志ん朝独演会」の文字。

#同、会場

超満員の会場。

テロップ「古今亭朝太改め　古今亭志ん朝」

『文七元結』を演じている。

強　次「(長兵衛)『お久、勘弁してくれ。な、お父っつぁん金輪際博打は打たねえよ。一生懸命稼いで迎えに行くから……おお！待ちな！』(長兵衛身

投げしようとしている文七を捕まえる。）
（文七）『どうぞお放しください！　死ななきゃならないわけが！』
（長兵衛）『どんなわけがあるのか知らねえが……』（長兵衛、文七を突き飛ばす）
（文七）『痛いじゃありませんか。怪我でもしたらどうしてくれるんです』……」
客席から見ている清。

#同、ロビー

終わって帰る客たち。笑いながら感想を述べ合っている人。みんな満足そうな顔をしている。
そんな客たちを清、隅からみつめている。

#孝蔵の家、夕方

洗面器を持った清が上がってくる。
美津子「ああ、もうそんな時間。父ちゃん、湯の時間だよ」
奥に孝蔵を呼びに行く。
強次の声「（豊志賀）『だってあたしが死ねばね、お前たちが喜ぶと思ってね。お前とお久さんだよ』
（新吉）『またはじめやがった。あたしとお久さんが何かあったの？　あったんなら言ってごらんよ』
（豊志賀）『いまはないよ。なりたくてもあたしってものがいるからね、なれずに我慢してるんだよ。その気持ちがわかるからね、早く死んでやりたいと思ってさ……』」
二階から強次の『真景累ケ淵　豊志賀の死』を稽古する声が聞こえてくる。
階段を昇る清。

#同、二階

そっと十畳間のふすまを開ける。
強次が一人で稽古をしている。
強　次「（豊志賀）『新さん、こんな顔になっちゃったよお』……」
気に入らずなんどもやり直す。
強　次「『新さん、こんな顔になっちゃったよお』……ちがうな、『新さん、こんな顔になっちゃったよお』……」
マネージャーの声「おじゃまします」

玄関からあがり、階段をのぼってくる音。
マネージャー、清に気づき頭を下げると十畳間のふすまあける。
マネージャー「志ん朝師匠、おはようございます」
出てくる志ん朝。清に気づく。
強　次「よお、あんちゃん」
清　「あいかわらず忙しそうだな」
強　次「のり平先生の稽古だよ。しごかれてばっかりなんでやんなっちゃうよ・・・・・・ああそうだ。今度ハワイにゴルフしにいくんだけど、一人空きが出ちゃったんだよ。あんちゃん一緒にどう？　飛行機代は出すからさ」
清　「俺はいいよ。たっぷり楽しんできな」
強　次「そうかい。じゃあまた」
強次とマネージャー階段を降りていく。

#同、十畳間
清、強次が稽古をしていた座布団に座る。
扇子を箸に見立てずるずるとそばを食べる動作。
清　「・・・・・」
孝蔵の声「おい、行けるよ」

#世界湯
のれんをくぐる孝蔵と清。
＊　＊　＊　＊
服を脱ぐ孝蔵と清。
＊　＊　＊　＊
湯船につかる孝蔵と清。
言葉は交わさない。
＊　＊　＊　＊
孝蔵の背中を洗う清。
孝　蔵「痛ててて。もっと優しくやっとくれよ」
清　「おやっさんの体、垢だらけなんだよ」
孝　蔵「痛いよ」

#谷中銀座
商店街を歩く孝蔵と清。

#夕焼けだんだん

空を見る孝蔵。

孝　蔵「おお、きれいな夕焼けだ。明日も晴れるね」

清　「なあ、おやっさん」

孝　蔵「なんでえ」

清　「名跡のことだけどな、本当は強次に志ん生を継がせてえんじゃないかい」

孝　蔵「……強次はあれだな。これからの落語会を背負っていけるぐらい大きくなるよ」

清　「だからどっちなんだ。俺に継がせたいのか、それとも強次に継がせたいのか」

孝　蔵「おめえには悪いけどよ。志ん生の名にふさわしいのは誰がどう見たって強次だろ」

清　「いいよ」

孝　蔵「へ？　おめえ今なんてった？」

清　「いいよって言ったんだよ。志ん生の名前は強次に譲るよ」

孝　蔵「清……ありがとう。ありがとう」

孝蔵、号泣する。

孝　蔵「なんて言って切り出したらいいか、俺は夜も眠れなかったんだ」

清　「……」

孝　蔵「こんな目出てえことぁねえや」

清　「……」

孝　蔵「よく決心してくれたなあ、清」

清　「……」

#孝蔵の家、前の道

孝　蔵「寄ってかねーか。菊政のいいのが送られてきたんだ」

清　「帰るよ」

孝　蔵「ちょっとぐらいいいだろ。たまには親子さしで飲もうじゃねえか」

清　「酒が飲みたかったら一人で飲んでろよ。泣きたかったら俺のいないところで泣いてくれ」

去っていく清。

#道

怒りに震えながら歩いている清。

雨が落ちてくる。

#諏訪神社　前の道～公園の中

傘をもって走ってくる治子。清を探している。

神社の中を見る治子。

神社からは国鉄日暮里駅が見渡せる。

清の後ろ姿。

近寄ろうとする治子。

清　「昔はどの橋にも橋番ってのがいて、その橋でまちがいが起きますと橋番の責任になりました。……」

足を止める治子。

清、国鉄に向かって小話をぶつぶつ稽古している。

清　『『こんなふうに毎晩身投げがあっては困るではないか』『あいすいません』上役からきつく叱られまして、その晩かーっと見ているってえと、ひとりばたばたと飛び出して欄干から飛び降りようとした男を後ろからつかまえて、『てめーだな毎晩こっから身を投げるのは』」

治子「……」

清　「貧乏で金はないけれどもどうしてもお相撲が観たい。そんな男が相撲小屋のテントにちょっとした隙間を見つけまして、頭からもぐりこもうとしたところ、すぐに係りのものに見つかって『おいおい、そんなところから入っちゃいけねえ』とひっぱり出されてしまいました。どうしてもお相撲が見たい。なんとか見る方法はないだろうか。思案を重ねた男は今度はお尻のほうから入っていくと、すぐに係りのものに見つかって『おいおい、そんなところから出ちゃいけねえ』と中に引きずり込まれてしまいました」

治子、笑いそうになるがこらえる。

清　「升落としでねずみを捕った時代がありました。『でっけえのふんづかまえたぞ』『見せてみろ。なんだい小さいじゃねえか』『人の捕まえたもんケチつけやがって。大きいよお』『小さい』『大きい』『小さい』『大きい』ってーと、ねずみが升ん中で『チュー』」

汽笛がプーと鳴る。

思わず吹き出す治子。

清、振り返り治子を見る。

治　子「お姉さんから聞きました。風邪をひきますよ」

治子、清に傘をさす。

清　「……家族の中に日本一の噺家と、これから日本一の噺家になるやつがいる。でも俺はどちらでもねえ」

治子「……」
清「親父にはフラがあって、強次には色気がある。俺には何がある？　なにもねえよ」
治子「何もなくてもいいじゃないですか」
清「……」
治子「何もないことを武器にすればいいじゃないですか。たしかにお父さんや強次さんの噺って、ちょっと聞いただけで『あ、志ん生師匠だ』『志ん朝さんだ』ってすぐわかって、それはそれで素晴らしいんですけれど、あなたの落語って演者を感じさせないんです。馬生は消えてしまって熊さんや八っさんがや与太郎さんが本当に目の前にいるような心地になる。あなたは私を江戸時代に連れてってくれるんです」
清「……」
治子「馬生の落語が好きな人、あなたが思ってる以上にたくさんいますよ。それでいいじゃないですか」
清「……なに言ってるんだ」

#並河家、和室

文楽と清、畳の部屋で相対して正座している。

清「よろしくおねがいします」
『厩火事』の稽古を始める。

＊　＊　＊　＊

文楽「(髪結い)『悔しいから泣いているんです。もうあんな人とは一緒にいられません。別れます』
(仲人の旦那)『そうかい。それがいい。だいたい俺はお前の亭主が嫌えなんだ。女房のお前が油だらけになって働いているときにぶらぶらぶらぶら遊んでる。な、別れなよ』

＊　＊　＊　＊

清「(髪結い)『……(すねて)別れなよって、あんまりひどい……あたしが一生懸命働いて、あの人食べさせて、いったいどこがどうだっていうんです』
文楽「そうじゃねえ。『あたしが一生懸命働いて、あの人食べさせて、いったいどこがどうだっていうんです』」
清「『あたしが一生懸命働いて、あの人食べさせて、いったいどこがどうだっていうんです』」

＊　＊　＊　＊

文　楽「(八五郎)『お前ねえ、また兄いのとこ行ってべらべらしゃべってたんだろ。みっともねえからよせって。夫婦のあいだで起きたことは夫婦のあいだで収めようじゃねえか。一言いうとわーって飛び出すんだから。……もういいよ。お前も忙しいんだから飯食っちゃお』

＊　＊　＊　＊

清　「(髪結い)『お前さん食べないで待っててくれたの？』
(八五郎)『そうだよ』
(髪結い)『お前さん、あたしと一緒にご飯食べたい？』
(八五郎)『なに言ってやんで畜生。夫婦だから一緒に食おうじゃねえか』

文　楽「そうじゃねえ。『なに言ってやんで畜生。夫婦だから一緒に食おうじゃねえか』

清　『なに言ってやんで畜生。夫婦だから一緒に食おうじゃねえか』……」

#博物館

熱心にメモを取りながら展示物を見ている。

#三遊亭金馬(三代目)宅

『転失気』の稽古を受けている清。

金　馬「(小僧)『みんな転失気(てんしき)っておならのことだって知らないんだな。杯(さかずき)ってことにしてやれ』……」

＊　＊　＊　＊

清　「(和尚)『粗末なのでございますがうちにも転失気がございました。先生転失気はお好きでしょうか。ちょっとここでご覧に入れます。まあ遠慮なさらずに』……」

#踊りの稽古場

躍る清。

#清の家、和室

ひとりで『花見の仇討』稽古している清。

清　「『何年以前わが父を討って立ち退きたる大悪人。ここで逢ったが優曇華(うどんげ)の花咲き待ちたる今日ただいま、親の敵、いざ尋常に勝負、勝負』……」

#三遊亭圓生(六代目)宅

『包丁』稽古を受けている清。

圓　生「『……三年前をお忘れかい。みずぼらしい身なりで現れて、それをあたしが人間らしくしてやったんじゃないか。それをいまさらあたしを売り飛ばすなんて……』」

#清の家、書斎

熱心に資料を読んでいる清。

#林家正蔵(八代目)宅

『たらちね』の稽古を受けている清。

正　蔵「『わらわもと京都の産にして姓は安藤、名は慶三あざなを五光、母は千代女と申せしが、わが母三十三歳の折り、ある夜丹頂の鶴の夢をみてはらめるがゆえに、たらちねの胎内をい出し時は鶴女鶴女と申せしがそれは幼名、成長の後これをあらためし清女とはべるなーりー』……」

#居酒屋

孝蔵と文楽が酒を飲んでいる。

文　楽「孝ちゃんねえ、ちったあ清のこと認めてやってもいいんじゃないですか。一度あの子の噺じっくり聞いておやりよ」

孝　蔵「あいつは生意気なことばかりいいやがって、まったくかわいげがねーんだ」

文　楽「甘えたいんですよ。それぐらい受け入れてやりなさいな。だいたいお前さん芸はあたしよりほんのちょっと落ちるだけかもしれないが、父親としては下の下の下ですからね」

孝　蔵「うるせえ。このはげあたま」

文　楽「はげあたまでもお前さんより百本は多く残ってますよ。(やきとりを食べながら)これはいいお肉使ってますね」

孝　蔵「(遠くを見て)おお、いいおっぱい」

文　楽「どこです(振り返って探す)」

孝蔵、その隙に文楽の皿のやきとりを食べてしまう。

文　楽「おっぱいなんてありゃしない。……あたしのやきとりがなくなってる！」

孝蔵、突然大声を出す。

孝　蔵「ああ！」

文　楽「こんどはどうしたんです？」

孝　蔵「俺、今夜鈴本入ってた」

#寄席、外

外は大雨。
看板に「古今亭志ん生」「金原亭馬生」の文字。
タクシーが止まり、孝蔵が降りて、建物の中に入っていく。

#同、楽屋

清が目を閉じて精神統一している。
赤い顔をした孝蔵が入ってくる。

孝　蔵「おあよっす(おはようございます)」
清、目もあわせようとしない。

前座D「馬生師匠、よろしくお願いします」
清、立ち上がり楽屋から出て行く。

#同、高座

出囃子「鞍馬」とともに登場する清。大きな拍手で迎えられる。
客席には治子もいる。
『鰍沢』を演じる。

清　『信心にこころ方にとって、身延に参詣することはなによりのことでございます。現在は国鉄ですぐにいけますが、昔は命がけ。足ごしらえを厳重にいたしまして、青柳の昌福寺へお詣りをしたあと、小室山で毒消しの護符を受け、法論石、鰍沢、そしてご本山へお詣りをいたします。……』
噺に引き込まれていく観客。

#同、楽屋

聞こえてる清の声。
孝蔵、立ち上がり楽屋から出て行く。

#同、舞台袖

孝蔵が来て清を見る。

#同、高座

清　「父親の骨を身延へ納める為江戸からはるばるやってきた一人の男。法論(ほうろん)石(せき)へお詣りをして、鰍沢(かじかざわ)へ降りる途中のことでした。雪国独特のどんよりとなまり色に曇った空、一生懸命降りますとやがて白いものがちらちらと落ちてきた。宿に急がなければと焦りますが、だんだん雪が積もってきて道がわからなくなった……」

#同、舞台袖
前座、椅子を持ってくる。
前座D「師匠、どうぞ」
孝蔵、座る。

#同、高座
清　「(新助)『南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、これはえらいことになった。日が暮れてきた。刺すような寒さだ。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経道に迷ったな。どこへどういったらいいかわからねえ。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……』」

#雪の中(イメージ)
道なき道を歩く新助。
新　助「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」
遠くに光が見える。民家だ。
新助、光に向かって歩いていく。

#お熊の家、前(イメージ)
ドアをたたく新助。

#寄席、高座
清、扇子で床を叩きながら。
清　「(新助)『こんばんは。あけてください。こんばんは。あけてください。』
(お熊)『だれだい』
(新助)『旅のもんでございます。道に迷いまして。後生でございます。今夜一晩だけ泊めていただけないでしょうか』
(お熊)『……入りなよ』」

#お熊の家、いろりの部屋(イメージ)
囲炉裏の火に当たる新助。
炎がお熊の顔に当たる。
粗末な着物を着ているが三十歳前後の美しい女。喉に刃物で切られた傷のあとがある。

新　助「おかみさんはもしかしたら江戸の方じゃございませんか」
お　熊「どうしてだい？」
新　助「言葉でわかります。浅草の観音様の裏のほうにいらしたことがございませんか」
お　熊「いたよ」
新　助「あの違っていたお詫びしますが、あなた熊蔵丸屋の日の戸花魁」
お　熊「誰だ、お前。誰だい？」
新　助「二年前にお情けを受けたもので、裏を返すつもりでいたんですが、心中なすったと噂で聞いて、がっくりきていました」
お　熊「そう。心中したんだよ。し損ないさ。その挙句こんなところでわび住まいさ」
新　助「あのこちら少ないのですが……」
新助、胴巻きから金を出してお熊に渡す。
お　熊「こんなことしてもらっちゃ困るよ」
新　助「いえ、ほんの気持ちです。おかげで命びろいしたんです」
お　熊「そうかい……」
お熊、新助の胴巻きをちらっと見る。

#寄席、高座
清　「(お熊)『お前さん、雪ん中歩いてきて体が冷えてるね。卵酒でもこしらえてあげようか』
(新助)『手作りの卵酒なんてめっそうもない』
(お熊)『さあ、おあがんな』
(新助)『すいません、花魁。いやおかみさんお酌までしていただいて、恐れ入ります』
(新助、酒を飲む)
(新助)『はじめていただきましたが、強い酒ですね。ああ外から暖っためて中から暖っためて、体中暖ったまりました。これ以上はいただけません』

#お熊の家、次の間(イメージ)

布団で眠っている新助。

#お熊の家、いろりの部屋(イメージ)

お熊はいない。

鉄砲を抱えた伝三郎が帰ってくる。

伝三郎「帰えったぞ。お熊……どこ行きやがった。亭主が雪の中稼いできたってのに……」

伝三郎、残されている卵酒を見つける。

伝三郎「亭主の留守中にこんなのかっくらってやがる」

卵酒を飲み干す。

伝三郎「嫌な味がするな。くさった卵使いやがったな」

戸が開く。お熊戻ってくる。

お　熊「お前さん！　それを飲んじゃだめだよ」

伝三郎「え？」

お　熊「毒が入ってるんだよ」

伝三郎「なんだって？」

伝三郎、苦しみだす。

伝三郎「助けてくれ……」

お　熊「お前さん！　しっかりしとくれ！　……お前さん！」

#寄席、高座

清　「(お熊)『ごめんよ、お前さん。あの旅人、ちょいと見るとたいそうお金持ってて、そいつを奪っちまえばあたしもお前さんもいまよりずっと楽ができると思って、お前さんがこしらえた痺れ薬まぜたんだ。こうなったらお前さんの仇はあの旅人だよ。お前さんの鉄砲であいつをぶち殺してやるから待っといで』」

#同、舞台袖

椅子に座って聞いている孝蔵の後ろ姿。

ときどき頷く。感心しながら聞いているように見える。

#お熊の家、次の間(イメージ)

隣の部屋の話し声を聞いている新助。

新　助「冗談じゃねえ。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

窓から逃げ出す。

#雪の中(イメージ)
裸足で逃げる新助。
鉄砲を持って追いかけてくるお熊。
お　熊「待っとくれ。忘れ物だよお」
新　助「忘れ物は命だけだい。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

#森の中(イメージ)
走る新助。
新　助「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」
鉄砲を持って追いかけるお熊。
お　熊「……殺してやる」
逃げる新助。
行き止まり。下を見ると岩淵に落ちる鰍沢の流れ。
下に山筏があるのを見つける。
新助、飛び乗ると筏がばらばらに崩れる。
丸太にしがみつく新助。丸太はなにかに引っかかって動かない。
追いつくお熊。鉄砲を構える。
お　熊「覚悟おし」
新　助「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」
発砲。それる。その拍子に新助のつかまっていた丸太が動き出す。
お熊、何度も発砲するが当たらない。

#川(イメージ)
流れていく丸太。
必死にしがみついている新助。
新　助「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」

#河原(イメージ)
命からがら助かった新助。
激しく息をしている。
新　助「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」

#寄席、高座
清　「(新助)『南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……。この大難を逃れたのも、お祖師様のご利益。たった一本のお材木(題目)で助かった』」

深々とお辞儀をする。
大きな拍手が沸き起こる。
常連A「いやあ、よかった」
常連B「ずいぶん化けちゃったよ」
拍手をする治子。

#同、舞台袖

戻ってくる清。
グオーといびきの音。
孝蔵寝ている。
清　「……」
清、孝蔵の頭をパコンとたたく。
びっくりして目を覚ます孝蔵。
去っていく清。

#同、楽屋

落語家たち。
落語家G「お疲れ様」
落語家H「今日は切れてたね」
清　「……」
清、その場に倒れんで、仰向けになる。
やりきった表情。

#同、高座

めくりに「古今亭志ん生」の文字。
出囃子が流れるが孝蔵出て来ない。
ざわつく客席。
やがて孝蔵、千鳥足で出てくる。
観客、心配そうに拍手する。
『船徳』をはじめる。
＊　＊　＊　＊
孝　蔵「(親方)『いいじゃねえか。あたしがなりたいんだから』
(若旦那)『船頭だけは請合えない。いやです。あなたにはお世話に……』
ｚｚｚ」
観客、「どうした?」と身を前に乗り出す。
孝蔵、突然噺を始める。

孝　蔵「『……あなたのお父っつあん、おっ母さんに』……zzz」
客　B「おい、寝ちゃってるよ」
孝　蔵「……『恨まれますよ！』」
観客大爆笑。
孝蔵、再び寝る。
ふたたび観客爆笑。

#同、楽屋
落語家「おい来てみろよ。珍しいもん見られるぜ」
落語家たち出て行く。
清、ひとりだけ寝転んでいる。

#同、舞台袖
落語家たち集まってくる。

#同、高座
半分眠りながら落語を続ける孝蔵。
孝　蔵「『喉のいいのはわかったけどねえ、どうしてこの船は……』zzz
『……ぐるぐるまわるの！』……」
寝てしまう孝蔵。

#同、客席
おおいに沸く観客たち。

#同、楽屋
寝転んでいる清。
買い物帰りのりんと美津子が入ってくる。山のように包みを抱えている。
後ろから山田夫人と佐藤夫人が申し訳なさそうに入ってくる。
り　ん「あ、いたいた」
美津子「ねえ、急に映画見に行くことになっちゃったの。悪いけど家まで持ってってくれない」
清　「……そのへんに置いときなよ」
り　ん「ついでに山田さんと佐藤さんにも届けてくれないかい？　お前家知ってるだろ」
山田、佐藤「すみません、いつもいつも」

りんと美津子出て行く。

清　「……いいですよ」

寝転んだままの清。

F・O

#清の家

F・I

昭和46年。

治子(40)、弟子の金原亭桂馬(18)につつみを渡す。

治　子「じゃあこれお願いね」

桂　馬「はい」

桂馬出て行く。

#孝蔵の家、庭

池の近くで椅子に座っている孝蔵(81)。食パンをえさにして金魚釣りをしている。

近くには巨体の弟子、圓菊が控えている。

桂馬がやってくる。

桂　馬「おはようございます」

孝　蔵「よお、お前(め)え清んとこの前座だろ。将棋指すんだってな。強えーのか」

桂　馬「いえいえ、下手の横好きってやつで」

孝　蔵「じゃあ一丁もんでやっからちょっと来い」

孝蔵、圓菊におぶってもらい家の中に入っていく。後についていく桂馬。

#同、台所～居間

清(43)、冷蔵庫から缶ビールを取り出して飲む。

居間からテレビの音。志ん朝の高座『明烏』が放送されている。

強　次『『……かたくって結構じゃありませんかった言ったら、かたすぎるってんだよ。これから先、あいつが商売を継いだとき、人様からつきあってもらえないから少しはやわらかくなってもらわなきゃ困るってんだ。えー？　たまにはお前さん遊びに引っ張り出してくれよって言われたんだよ』……」

テレビの前でりん(71)がうたたねをしている。

清、テレビを消し、りんに毛布をかけてやる。

桂馬が血相を変えて飛び込んでくる。

桂　馬「師匠、申し訳ありません」

清　「どうした」

桂　馬「大師匠怒らせちゃいました。もう二度と来るなって」

清　「なにしくじったんだ」

桂　馬「志ん生師匠が将棋指そうっていうから三局指したんですけど、三局とも俺が勝っちまったんです。それで機嫌悪くなっちまって……」

清　「そうか。今後な、おやじと将棋を指す時は、……絶対手加減するな。お前え全部勝て」

桂　馬「……」

#国立劇場、小ホール、高座

落語研究会で『大仏餅』演じている桂文楽(79)。

文　楽「(旦那)『お前さんは真のお茶人だ。お流儀は』

(物乞い)『千家でございます』

(旦那)『どなたのご門人だ』

(物乞い)『川上宗寿の弟子でございます』

(旦那)『あなたのお名前は』

(物乞い)『あたくしのお名前は申し上げたくないのでございますが数々のご親切、何をお隠し申しましょう。あたくしは芝片門前に住まいおりました……』

名前がでてこない。

いぶかしげな観客。

思い出そうとする文楽。

#同、舞台袖

弟子の小勇が教えようとする。

小　勇「神谷幸右衛門！　神谷幸右衛門！」

#同、高座

文楽、どうしても思い出せない。

文　楽「……セリフを忘れてしまいました。誠に申し訳ありません。勉強してまいります」

文楽、深々と頭を下げ高座から降りる。

騒然となる観客。

#並河家、庭

ぼんやりときせるをふかしている文楽。
門が開く。

文　楽「……」

圓菊におぶられた孝蔵が入ってくる。

孝　蔵「よお、黒門町」

文　楽「……孝ちゃん」

#同、縁側

将棋を指している孝蔵と文楽。圓菊は近くで控えている。
一手指すごとに大声を上げるふたり。

孝　蔵「ほら、これでどうだ」

文　楽「桂の高飛び歩の餌食と」

孝　蔵「初王手目の薬」

文　楽「金底の歩岩より固し」

孝　蔵「玉の早逃げ八手の得」

文　楽「目から日が出る王手飛車」

孝　蔵「ああ、待った」

文　楽「待ったなし」

孝　蔵「頼むよ」

文　楽「……じゃあ一回だけですよ」

駒を戻す孝蔵。

孝　蔵「ありがてえ。俺はな、お前(め)えと将棋を指すのが一番好きなんだ。他の奴だと釣りあわねえ。強すぎていけねえよ。……ほら銀が泣いてるよ」

文　楽「なに言ってるんです。三桂あって詰まぬことなし」

孝　蔵「んん!?」

孝蔵、盤を睨みつけ考え込む。

文　楽「前から聞こうと思ってたんですけどね、孝ちゃん小文治師匠嫌いだったでしょ」

孝　蔵「なんでわかった」

文　楽「お前さんの考えてることなんて全部お見通しですよ」

孝　蔵「三木助とか」

文　楽「あの人(しと)のいびきはうるさかった。あと馬風はヒロポンでくたばっちまったし」

孝　蔵「圓歌も憎かったねえ」
文　楽「金馬とか、三亀松ってのもいばってましたね」
孝　蔵「ああ、デエっ嫌い。こんなおっ死んじまえっていつも思ってたよ」
文　楽「……ああ、みんな死んじまいましたよ」
孝　蔵「そうだな。それでもって一番嫌な奴が生き残ったと」
孝蔵、文楽を見る。
文　楽「……ああ、違えねえ」
笑う二人。
孝　蔵「俺とお前えだけになっちまった。まあ仲良くやろうじゃねえか」
孝蔵、将棋盤に顔を戻し、考える。
文　楽「なあ、孝ちゃん」
孝　蔵「ん？」
文　楽「日暮里よお」
孝　蔵「なんだい？」
文　楽「志ん生さんよお」
孝　蔵「だからどうしたっていうんだよ」
文　楽「……あたしはもうだめだ」
孝　蔵「……」
庭を眺める文楽。
孝蔵、そのすきに駒をささっと動かす。

#孝蔵の家

りんの遺影。
りんの通夜が行われている。
弔問客でごった返している。
美津子、喜美子、治子は近所の主婦たちと料理作りに忙しい。
泣いている強次、弟子たちに慰められている。
清、葬儀社の人間にてきぱき指示を与えている。
孝蔵はひとり酒を飲んでいる。近くにいた女芸人を前に座らせて手を握る。
孝　蔵「お前え、俺と一緒に温泉でも行かねえか」
困っている女芸人。
清、近づいてきて孝蔵の頭をパコンと殴る。
孝　蔵「痛て！」
逃げていく女芸人。
治子と強次、小勇を中心として文楽の弟子たちを連れてくる。

治　子「文楽一門の方々がいらっしゃいました」
　　文楽一門の面々、孝蔵、清、強次の前に座る。
小　勇「このたびは誠にご愁傷様でした」
孝　蔵「黒門町はどうした」
小　勇「文楽師匠も来たがってたんですけど、どうしても体調が悪くて。すみません」
孝　蔵「風邪ひいたぐらいでひっくり返ってんじゃねえよ」
小　勇「心よりお悔やみ申し上げますと」
孝　蔵「薄情な奴だぜ、まったく」
小　勇「申し訳ありません」
孝　蔵「行け行け、顔も見たくねえや」

#孝蔵の家　一階の和室～縁側～庭
　テレビから流れてくるニュース。
　庭で子どもたちが遊んでいる。(喜美子に二人の男の子、清に三人の女の子、強次に一人の男の子がいる)
　縁側に座り見ている孝蔵。
　美津子、清、治子、強次、強次の妻聖子が香典を数えたり、お礼状を書いたりと葬儀の後始末をしている。
アナウンサー「落語家で戦後最高の名人のひとりと呼ばれる桂文楽さん、本名並河益義さんが午前九時、肝硬変のため亡くなりました。七十九歳でした……」
　テレビの前に釘付けになる清と強次。大きなため息。
　ウォーと孝蔵の泣き声。
孝　蔵「……みんな、いなくなっちゃった」
　号泣する孝蔵。
　F・O

#孝蔵の家、和室
　F・I
　寝ている孝蔵。死期が近い。
　清入ってくる。おぼんに熱燗をのせている。
孝　蔵「持ってきてくれたかい」
　清、お盆を置いて孝蔵を起き上がらせる。
清　　「調子はどうだい」
孝　蔵「早く一杯くれ」

清、おちょこに酒をついで孝蔵に渡す。
孝蔵、しみじみと匂いをかいで味わって飲む。
孝蔵、おちょこを清に渡す。
清　「もういいのかい」
孝　蔵「ああ、酒はうまいねえ」
孝蔵、横になる。
清、部屋から出て行こうとする。
孝　蔵「なあ待てよ。もうちょっと話をしねえか」
清、座る。
孝　蔵「お前には今まで随分厳しいことを言ってきた。でもな、俺は期待してるんだ。このままじゃ落語はだめになっちまう。全部お前えにかかってるんだぞ。後は頼んだぜ」
清　「……おやっさん、実は俺も……」
孝　蔵「もっともっと志ん朝の名前を大きくしろよ。強次」
清　「……清はどうなんだよ。兄貴のほうは」
孝　蔵「清か。あいつは……そうだな……いままで誰にも言わなかったけれど……」
清　「言わなかったけれど？」
孝　蔵「あいつはホントに」
清　「ホントに？」
孝　蔵「なんだな」
清　「だからどうなんだ」
孝　蔵「……」
清　「……？」
グオーといびき声。
清　「……」
眠る孝蔵。
清、静かに部屋から出て行く。
孝蔵の安らかな寝顔。
F・O

#孝蔵の家、和室
仏壇。りんの写真の横に、孝蔵の写真。
桂馬が手を合わせている。
桂　馬「いつか志ん生の名前はあたしが継ぎますんで、どうぞ安らかにお休みください」

清　「おい」
　　びっくりする弟子。
桂　馬「すみません」
清　「まだ何もいってないだろ。ちょっと来な」

#同、居間
　　清と桂馬。
清　「この部屋掃除したのお前えだろ」
桂　馬「はい」
　　清、花びんを取り底を指す。
清　「触ってみな」
　　桂馬、底をさわる。ほこりがついている。
清　「俺はお前えを召使として置いているんじゃないんだよ。他人に見えないところほどきちんとしておく。それが芸ってもんだよ」
桂　馬「はい、すみません」

#同、二階
　　桂馬に稽古をつけている清。
　　隅で数人の弟子たちが正座して見ている。
桂　馬『ご隠居、いるかい』『よお、熊さん、まあ座んなよ』
清　「だめだめ、そうじゃねえよ。ちょっとここに座れ」
　　清、弟子を自分の横に座らせると立ち上がり廊下に出る。
清　「いいか、お前えのいる場所にご隠居が座っているんだよ。熊はこっから入ってくるんだ」
　　清、熊を実演する。ふすまを開けて入ってくる真似。
清　『ご隠居いるかい』　そのときご隠居は熊を見るだろ。(座っている弟子と立っている自分を指して)この距離感なんだよ。いまのお前えの目線をちゃんと覚えとけよ」
　　深く頷く弟子。
　　見学の弟子たちも納得している。
清　「それから熊っていうのはどんな人間なんだ」
桂　馬「……大工です」
清　「どんな大工なんだ？　どんな横丁で育った？　どんな親だった？　どんな食い物が好きで、どんな趣味があって、どんな女に惚れてきた？　そういうことをきちんと考えることで、生きた人間が生み出せるんだ」

#同

ひとりで稽古をしている清。

#墓地

美濃部家の墓の前で手を合わせている清。

#ホール、外

「金原亭馬生独演会」の看板。

#同、中

満員の観客。

#同、舞台袖

客席をみる清。弟子から受け取ったお神酒を飲み干すと、出囃子「一丁入り」(志ん生の出囃子)とともに高座に出て行く。

#同、高座

大きな拍手に迎えられる清。

清　『傾城(けいせい)の恋はまことの恋ならで、金持ってこいが本当(ほん)の恋なり』金でつながっている恋なんですからな。『女はとおんと惚れてやがらあ、本当(んとう)に。こっちは情夫(まぶ)だ』むこうじゃ虻(あぶ)とも思っていなかったりして……」

清　「　……(絶句する)」

観客たち。

心配そうな治子。

弟子たち。

清　「……」

清のすぐ横に孝蔵の幽霊が現れる。

孝　蔵「よお、なにやってんだ。まったくだらしねえ」

清　「花魁の名前忘れちまった……『お見立て』だよ」

孝　蔵「いいんだよ。子照でもお染でも適当にでっちあげとけ」

清　「そんなわけにはいくかい」

孝　蔵「じゃあ『おいらん』で最後まで行けばいいじゃねえか」

清　「頼む。教えてくれ」

孝　蔵「喜瀬川（きせがわ）だよ」
清　「助かった。ありがとよ」
　　『お見立て』を演じる。
清　「『(花魁・喜瀬川) いやなものはいやなんだよ。命にはかえられないよ。あいつのそばに寄っただけで震えがくるんだよ。熱は出てくるし、動悸は激しくなるし、命からがら逃げ出してくるんだから』
孝　蔵「だめだ。だめだ。そこは『いやなものはいやなんだよ。命にはかえられないよ。あいつのそばに寄っただけで震えがくるんだよ。』」
　　清、言われたとおりに演じる。
清　「『いやなものはいやなんだよ。命にはかえられないよ。あいつのそばに寄っただけで震えがくるんだよ。』」
孝　蔵「そう」
清　「『(若い衆・喜助)ねえ花魁、そんなわがまま言っちゃ困りますよ。ちょっとでいいから顔を出してくださいよ。喜瀬川はまだか、喜瀬川はまだかってずうっと待ってるんですから』」
孝　蔵「そうそう」
清　「『(喜瀬川)だからさあ、あたしがここにいないって言やあいいじゃないか。そうだわずらって入院しちゃったって』」
孝　蔵「いいねえ」
清　「『(喜助)そうはいきませんよ。最初に花魁お待ちかねですよ、って言っちゃったんですから』」
孝　蔵「清よお、お前えますます俺に似てきたな。俺の若い頃と瓜二つだぜ」
清　「冗談じゃねえよ。誰がおやっさんなんかに似るかよ。俺はな、昔からあんたがデっ嫌いなんだよ」
孝　蔵「そうかい。俺はお前えのこと結構好きだぜ」
清　「……」
　　清に微笑む孝蔵。
清　「……なあ父ちゃん」
孝　蔵「なに甘えた声出してんだ。気持ち悪イな」
清　「ひとつだけ教えてくれ」
孝　蔵「長男だったらしゃんとしやがれ。このばか」
清　「……俺、ちったあ、うまくなっただろ」
孝　蔵「……」
清　「俺の落語、面白いだろ」
孝　蔵「……」

清　「なあ、父ちゃんよお」
孝蔵「……まあまあじゃねえのか」
清　「……」
孝蔵「何してるんだ。お客がおいてけ掘りだぜ」
孝蔵、清の上手に座る。
喜瀬川と木兵衛役に孝蔵、喜助役に清。ふたりで『お見立て』を演じる。
孝蔵「『(喜瀬川)大丈夫だよ。はじめにそういうふうに言わなければいけなかったんですけれども、旦那様のお顔をみてついつい言いそびれてしまいました。本当の事をいいますと花魁は十日ばかり風邪をひきまして、それでも勤めに出ていたためにこじらせてしまいました。お医者様にみせますと、このままじゃ肺炎になるといわれまして、病院にいれてあるんです。ってこう言やあいいんだよ』」
清　「『(喜助)わかりましたよ。……(部屋を出る)まったく薄情な人だ。でもこっちもこっちだね。こんなに嫌われているのに、気づかないもんかね。ごめんください。ごめんください(ふすまを開ける)』」
孝蔵「『(野田の木兵衛)あれ喜助でねえか。そうだらとこいねえでこっち来。喜瀬川はどうした』」
清　「『(喜助) じつはたいへん申し上げにくいんですが、はじめにそういうふうに言わなければいけなかったんですけれども、旦那様のお顔をみてついつい言いそびれてしまいました。本当の事をいいますと花魁は十日ばかり風邪をひきまして、それでも勤めに出ていたためにこじらせてしまいました。お医者様にみせますと、このままじゃ肺炎になるといわれまして、病院にいれてあるんです』」
孝蔵「『(木兵衛)ばかやろ。なんで早く言わねえ。そうすれば早く帰ったでねーか』」
清　「『(喜助)お帰りになりますか、お帰りはこちら』」
孝蔵「『(木兵衛) 待て待て。帰(け)えるには帰えるけどな、その前に病院に行くべ。案内ぶて』」

＊　＊　＊　＊

孝蔵「『(喜瀬川) いやだねえ。じゃあしょうがない。死んじゃったってそう言いなよ』」
清　「『(喜助)そんな乱暴な。むこうは信じないよ』」
孝蔵「『(喜瀬川) 信じないことはないよ。いいかい。はじめに言わなければいけませんでしたが、誠にお気の毒さまでございますから入院していると

申しました。しかしいずれ知られてしまうことですから本当の事をいいます。花魁はお亡くなりになったのでございます』

清　『(喜助)なんで死んだって言われたらどうするんです。診断書見せろとかいいかねませんよ』

孝蔵　『(喜瀬川)あんまり旦那様がいらっしゃらなかったんで、花魁たいそう心配しまして、わずらっているんじゃなかろうか、それとも他に増花(ますはな)ができたんじゃないだろうか。すぐに飛んで行きたいが勤めの身だからそれはできない。お手紙を差し上げたいが、親御さんに見られてもたいへんだ。どうしたらいいどうしたらいいと、しまいには食べるものも喉を通らなくなり糸のようにやせ細ってしまいました。そしてある日のこと、喜助どんあの人は罪な方、私は不幸な女とにっこり笑ったのがこの世の別れでございました、ってこう言やいいんだよ』

＊　＊　＊　＊

喜助役の清、うそ泣きをしながら

清　『(喜助)うわー、うわー、はじめに言わなければいけませんでしたが、誠にお気の毒さまでございますから入院していると申しました。しかしいずれ知られてしまうことですから本当の事をいいます。花魁はお亡くなりになったのでございます。うわー、うわー、あんまり旦那様がいらっしゃらなかったんで、花魁たいそう心配しまして、わずらっているんじゃなかろうか、それとも他に増花ができたんじゃないだろうか。すぐに飛んで行きたいが勤めの身だからそれはできない。お手紙を差し上げたいが、親御さんに見られてもたいへんだ。どうしたらいいどうしたらいいと、しまいには食べるものも喉を通らなくなり糸のようにやせ細ってしまいました。そしてある日のこと、喜助どんあの人は罪な方、私は不幸な女とにっこり笑ったのがこの世の別れでございました。うわー、うわー』

旦那役の孝蔵、泣きながら

孝蔵　『(木兵衛)それはかわいそうなことをした。とむらいはちゃんとしたのか』

清　『(喜助)それはもちろん。とむらいからなにからなにまで全部終わりました。だんな様のすることはなにも残っていません。後は帰るだけです。さあ、お帰りはこちら』

孝蔵　『(木兵衛) 待て待て。墓まいりにいくべ。案内ふて』

清　『(喜助)へ？』

＊　＊　＊　＊

孝　蔵「『(喜瀬川)しつこいねえまったく。それで墓は遠いって言ったんだろ』」
清　「『(喜助)それが山谷って言っちゃったんですよ』」
孝　蔵「『(喜瀬川)馬鹿だねえ。稚内とか肥後の熊本とかなんとか言ってときゃいいんだよ。じゃあいいよ。山谷に墓参りしといで』」
清　「『(喜助)あなたの墓なんかありゃしませんよ』」
孝　蔵「『(喜瀬川)山谷行きゃいっぱい墓があるだろ。新しいそうなもの見つけて、これがそうでございます、って拝んでくりゃいいんだよ』」
清　「『(喜助)墓はのっぺらぼうじゃないんですよ。読まれたらどうするんです』」
孝　蔵「『(喜瀬川)見えないようにお花で囲っちゃうんだよ。お線香もいっぱい焚いてね』」

＊　＊　＊　＊

喜助と旦那、山谷までの道を歩きながら、

清　「『(喜助)また落ち着きましたら手前どものところにおいでになって、別のお娘さんをお見立てになってくださいよ』」
孝　蔵「『(木兵衛)まったくのんきなやつだ。それでどこだ。喜瀬川の墓は』」
清　「『(喜助)とりあえずこっちのほうへ行ってみましょうか』」
孝　蔵「『(木兵衛) なんだとりあえずっていうのは』」
清　「『(喜助)ああ、こちらです。……新しい墓はないかいな……ありましたありました。こちらがおいらんの墓です。(花を飾って線香をたき、扇子であおぐ)』」
孝　蔵「『(木兵衛)これがそうか、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、かわり果てた姿になってしまったなあ。ゴホ。おらお前と夫婦に……ゴホ、おらお前と夫婦に……ゴホ、(激しく咳)扇ぐんでね！　なんだのろしみたいに焚きやがって。(墓を読む)天保三年アンモーヨーク一信士？　信士って男の墓でねえか』」
清　「『(喜助)まちがえました。こちらこちら』」
孝　蔵「『(木兵衛)まちがえるやつがあるか。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、こんなことになるなら、仕事なんかやめちまってもっと頻繁に会いにきて……ゴホ、会いにきて……ゴホ、(激しく咳)扇ぐんでね！　またこんな花飾りやがって。(墓を読む)チゼン童子？　こりゃ子どもの墓でねえか』」
清　「『(喜助)まちがえました。こちらこちら』」
孝　蔵「『(木兵衛)本当か？　先にあらためるぞ。(墓を読む)陸軍歩兵上等兵の墓。ばかやろ！　本当は喜瀬川の墓どこにある?』」
清　「『(喜助)こんなにお墓がたくさんございます……』」

#同、高座

一人で演じている清。

清　『(喜助)お好きなものをお見立て願います』

深々と頭を下げる清。

太鼓の音。

なりやまない拍手。

了